忘れがたい名曲

小樽市医師会

外岡　立人

好きな曲は生涯にわたって聴き続ける。僕の場合、若い頃ギターを弾いていたせいもあり、ギター曲のいくつかも耳を傾けることが多い。それらの曲の中に一生を通じて年齢とは無関係に、感性を刺激する何かがあるからだろう。

ギター曲の中でも、バッハの曲は解釈も技術的にも高度なものばかりだ。

ギターの場合、弦を押さえ損なうと音が出ない。平均律に従って埋め込まれた細い金属製のブリッジの外側でしっかり弦を押さえないと、音はかすれるか、または出ない。一番多い場合で六個の音を左手で作り出すことが可能だ。しかし、それら六個の音がバッハのフーガのように個別に忙しく動き回るときは、奏者の技術的差が露骨に現れる。

バッハの『無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ』からの編曲であるシャコンヌは、そうした意味ではギターの難曲中の難曲とされる。

しかしシャコンヌはバッハが聴き手に多くのことを語っていることでも有名であるが、僕は神と人との架け橋と感じている。それだけ解釈は難しいとされ、狂信的バッハ愛好者は、シャコンヌをギターで弾くことは、神の冒涜だ、とまで言ったとされる。いまだギターが単なる世俗的楽器と思われていた頃の話だ。

僕が最初にこのシャコンヌのギター版を聴いたのは学生時代で、奏者は二十世紀の名ギタリスト、ナルシソ・イエペスだった。ロンドンレーベルのＬＰだったが、それを購入するために家庭教師で得た小遣いの半分を費やした。

イエペスの透明なガラスのような音で始まる最初の和音の連なり。それは僕の音楽観を変えた。パイプオルガンのように滑らかに流れる高音の早いパッセージ。二部に入って明るく奏でる神の国。僕は完全にシャコンヌの虜になってしまった。それから僕はバッハの世界に入っていったのである。

シャコンヌは、ヴァイオリンはもちろん、ピアノ、そしてオーケストラとさまざまな演奏がある。どれも素晴らしいのはもちろんだが、ナルシソ・イエペスほど神を意識した演奏はないように僕は思っている。その演奏は厳しい修行僧の祈りのように聞こえてくるときもあるし、時にはイエペスが神を語っているようにも聞こえる。イエペスは間違いなく、譜面に忠実に（ここが奏者によって見解が分かれるところなのだろうが）バッハを弾いているのだが、その端正な調べは、イエペスと神の対話のように僕には聞こえてくるのだ。

イエペスの演奏は何度も聴いた。またドイツ留学中にも聴いた経験がある。二晩連続の演奏会だったが、そのプログラムの中にもシャコンヌはあった。静まりかえったフライブルク大学の大聖堂の中で厳かにあの最初のロ短調の主和音が鳴り響いたとき、僕は間違いなく時空を超えて神が存在しているような感覚に陥っていた。

音楽とは実に不思議なものだと思う。僕は日曜作家でもあるが、文学は言葉の羅列の背後に書き手の感性からの産物を忍ばせる。そこでは知性というものが媒体となる。絵画は視覚を介して直接感性に訴えかける。そして音楽はとなると、音を介するのは間違いはないが、これも直接感性に訴えてくる。なぜ僕がバッハのシャコンヌが好きなのか、それを分析する手段はない。シャコンヌを感性で受け止めるには知性が必要なのだろうか。またそこで使われる旋律、和声、そしてリズムを理解するためには、古典音楽を長らく聴いていたという経験や知性などが必要なのだろうか。残念ながら僕の音楽美学に対する素養では答えは出せない。

二百年も三百年も昔に作られた曲を、現代人の感性が受け止めることができるとは、驚きである。飢えやペストの流行で大勢の人間が死んでいた時代に作られた音楽を、現代の僕たちが耳にして、そしてその中に存在している、訴えかける【何か】を感じ取ることができる。それはもちろん絵画でも同じことだろう。僕たちは感性を介して【何か】を感じ取っているのは間違いは無い。その【何か】は当時の人々の【何か】と同じものなのだろうか。僕はそこに興味を持つ。

昔の人は【何か】を表すとき、悲しみの旋律を用いたのだろう。その悲しみの旋律は見事に現代の僕たちの感性に悲しみを伝える。その悲しみは僕たちそれぞれにとって異なる光景を映し出しているはずだ。【人の死】【恋人との別れ】【職場での人間関係の辛さ】などいろいろ光景はある。その光景は、昔の人たちがその悲しみの旋律を聴いたときの光景とは違うはずだ。

ここで僕はイエペスの弾くシャコンヌの調べに戻る。あの悲しみを秘めた厳かな和音の連なり。そこには明確な光景はない。音はただ僕の感性を介して心の奥底に、光景のない、厳かな悲しみを静かに伝えてくるのだ。それは全ての【悲しみ】の光景の根源のように僕は感じる。イエペスは（バッハは）その根源を神の前に提出しているのかもしれない。いや提出ではなく、哀願といったほうが近い。シャコンヌという曲は、そこまで完成された音楽なのかもしれない。